

主体的な学習者を育てる

学ぶ喜び 2025.11.17 VOL.17 ー仲間とともにつながる学校へー

11/7に豊中14中の公開研に行ってきました。テーマは「自己調整のある学習」でした。自己調整学習は自由進度ともまた違う。何を「自己調整」するのか、を考える機会になりました。関西大学の黒上教授の講演内容の共有、後半は「協働的に学ぶ」ことについてのお話です。

「協働」の力を最大化する対話のデザイン

重視したいのは「対話を通じた協働」のメカニズム

主体的な学びは、他者との「協働」によってその深みを増す。しかし、ここの「協働」とは、単に作業を分担したり、隣の席の生徒と話し合ったりするだけのグループワークを指すのではない。(6月の山下指導主事からのお話でも、同じようなことをおっしゃっていました。)
黒上先生は、タスクの「分担」や、専門家グループを作って知識を持ち寄る「ジグソー法」といった従来の共同学習も一つの形ではあるとしつつ、それらが必ずしも学習の深化に繋がらないケースがあることを指摘されていました。では、学びを本質的に豊かにする「協働」とは、どのようなものなのでしょうか。

1 自分の理解を他者に説明

自分の考えを言葉にして相手に伝えようとすることで、自身の理解が明確になり、曖昧な部分が浮き彫りになります。

2 相互的な関わりが発生

「1」の説明に対して、聞き手から「それはどういうこと?」「こういう考え方もあるのでは?」といった批評、アドバイス、質問が生まれます。この相互的なインタラクションが、思考を刺激します。

3 理解を再構築

他者からのフィードバックを受けて、自分自身の当初の理解を見直し、修正し、より洗練させていく。この説明と対話、そして再構築のプロセスこそが、前号(TM通信16号)で述べた「理解の仕方の調整」の実践そのものです。まさにこの瞬間に自己調整と協働が融合し、「理解の仕方の調整」は、孤独な作業ではなく、他者と関わるダイナミックな活動へと昇華するということです。

4 ICT端末を「思考の道具」として活用

1人1台端末の導入目的は、AIドリルで個別学習を進めることや、調べ学習の効率化だけに留まりません。黒上先生は、ICT端末を、単なる効率化ツールではなく、思考を可視化し共有するための「とんでもない道具」と表現されていました。これを活用することで、「学びに向かう力」を具体的に捉え、育成することが可能になります。

黒上先生の講演資料



理解の調整

生徒が自らの「理解の仕方」を調整することが主体的な学びの核心。複数の説明モデルから自分に合った「わかり方」を見つけるプロセスを重視する。

ICT活用

ICT端末を「思考の道具」として活用し、全員の考えを可視化・共有する。これにより、思考のプロセスを具体的に評価することが可能になる。

対話の力

他者との対話を通じて思考を深め、理解を再構築する。単なる分担ではなく、説明と質問のやりとりが学びを豊かにする。

明日の一步

「説明する場面」を一つ取り入れることから始める。小さな変化が、生徒を真の学習主体へと押し上げる大きな一歩となる。

まとめ

※このような本質的な対話を生み出すためには、生徒一人ひとりの思考を可視化し、共有する仕組みが不可欠です。そこで強力な武器となるのが、1人1台配備されたICT端末です。

3

理解再構築の過程 2. 考えをやりとりする(思考の共有)

提出された個々のカードをクラス全体で共有します。生徒は他者の多様な考えに触れコメントを付け合うことができます。(ロイロでもできますが、Canva(キャンバ)もおすすめてです。)これにより、教師が介入しなくても、生徒間での自然な対話が生まれ、学びが相互に刺激される環境が整います。

3. 考えを振り返り、更新する(思考の変容)

他者の意見に触発され、最初の自分の考えを修正したり、発展させたりする活動を促すことができます。この「思考の変容」のプロセスこそが、学びが深まった証拠となります。

これらの活動から生まれる成果物(提出されたカードやコメントの履歴など)は、教師が「生徒は一生懸命やっているか」といった曖昧な印象で評価するのではなく、生徒の思考プロセスそのものを具体的に評価するための貴重な資料となります。ICTツールをこのように活用することで、これまで理念として語られてきた主体的な学びが、日々の授業における具体的な活動として実現可能になるということです。

福山市の中学校の英語のテスト事例から ー学力観と評価のあり方を考えるうえで

従来の「『そのカメラは日本で作られましたか?』という日本語に合うように、英文の穴を埋めさせるテスト」と、「『受動態とは何か?』を自分の言葉で説明させ、それを用いて『自分が行きたい国、都市、日本の都道府県』について文章を作成させるテスト」とを比較したとき、どちらが生徒の深い理解と思考力を測っているかは明らかです。後者のような評価こそ、生徒が「説明する」活動を通して学んできたことを真っすぐに受け止める、本来あるべき評価の姿ではないでしょうか。